ゆたかな心をはぐくむ

人権のひろば 183

人権教育・啓発課 ☎(232)2113

人権啓発標語

『ちがうこと』 それはきっと たからもの

武蔵ケ丘小学校　5年　山口　拓真（たくま）（現在6年生）

「じろちゃんのさくぶん」を学しゅうして

菊陽中部小学校　1年　﨑山　心葉（ここは）（現在2年生）

互いの考えを伝え合って

ほんとうのじろちゃんはすごくやさしいのに、ほんとうのじろちゃんのことをクラスのともだちはしらないかもしれないから、じろちゃんはいっしょうけんめいにさく文にかいてつたえたいとおもったんじゃないかなとみんなでかんがえました。

わたしは、ともだちをきめつけてしまったことがあります。おにごっこをしてるときおにじゃない一人の人から、

「あの人、あしがおそいからだいじょうぶだよ。」

といわれて、

「うん、そうだよ。」

といってしまいました。そのことはいまもすごくおぼえています。すぐに

「ごめんね。」

といいました。

「ごめんね。」

というとき、こわくて、どうしようとおもいました。でも、

「いいよ。」

といってくれて、とてもうれしかったです。

でもきめつけられた人は、いやなきもちがずっとこころにのこるとおもいます。いままで、きめつけをしている人にちゅういをしていなかったから、

「どうしてそんなこというの。」

「じぶんがいわれたらどうなの。」

といえばいいとおもいました。

先生から

自分がしてしまったことをしっかりと振り返ることができることはとても大切なことです。決めつけをした人、それを見て見ぬふりをした人、決めつけられた人、それぞれの気持ちを考えながら、どうすればみんなが本当の思いを伝え合うことができるようになるのか、クラスのみんなで一緒に考えながら、たくさん知りあっていきたいと思います。

新しい権利としての「差別されない権利」

2016（平成28）年、神奈川県川崎市の出版社が全国の被差別部落を一覧にした書籍を出版しようとし、インターネット上に一覧を掲載する事件が起きました。この事件に対し230人余りが原告となり、書籍の出版禁止や一覧の削除を求めました。

2021（令和３）年９月には、東京地方裁判所が「プライバシー権の侵害」と「名誉権の侵害」を認める判決を出しました。しかし、原告、被告のどちらも裁判のやり直しを求めました。その控訴審判決が、2023（令和５）年６月に、東京高等裁判所で出され、画期的な判決と注目されました。

注目点①　差別の具体的な被害の発生がなくても、不安感で法的な利益侵害を認めた点

プライバシー権の侵害と別に、個人の尊重や幸福追求権を定めた憲法13条と、法の下の平等を定めた憲法14条を根拠に「人は誰しも、不当な差別を受けることなく、人間としての尊厳を保ちつつ平穏な生活を送ることができる人格的な利益を有するのであって、これは法的に保護された利益である」と判決文で述べられました。

注目点②　「差別されない権利」を根拠に判決が出された点

憲法14条には、「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において差別されない」とあります。これまでの判決は、前段の平等権を視点としたものでしたが、今回、後段の「差別されない権利」を根拠に判決が出されました。

現在、私たちの社会には部落差別や障がい者差別、ハンセン病回復者やその家族に対する差別、水俣病に関わる差別、外国人やＬＧＢＴＱに関わる差別など、多くの差別があります。今回の被差別部落の人たちに認められた「差別されない権利」は、全ての人たちに保障されるものです。今回の東京高等裁判所の判決は「人権」を保障しようとする画期的なものであり、新しい権利として共有していきたいものです。

学校だより 74

武蔵ケ丘小学校

『赤・白　がんばろう！ ～結団式～』

今年の運動会のスローガン「元気100倍みんなで協力して　笑顔いっぱいの運動会にしよう」を結団式で披露しました。この日から、運動会の練習を2週間行いました。5月25日㈯の運動会本番では、全ての学年が元気と笑顔いっぱいの演技や走りを見せ、最高の運動会となりました。保護者の皆さんや地域の皆さんからも、たくさんの感動の声がありました。応援ありがとうございました。

全校生徒の前で運動会のスローガンを披露

きくよう文芸 5月

菊陽句会報

新茶揉む明治の妣（はは）の根気なる　紫藤　祥子

幟立つ試飲三杯新茶かな　曽我　育代

祖父の背（せな）記憶遥かや剪定す　曽我トモ子

メーデーの聞こゆ話題の半導体　緒方チエ子

音立てて庭木波うつ青嵐　吉田　幸子

春雷や地震の不安を掻き立たす　木村　信子

滴（したた）りて静寂（しじま）に通ふ風の径　田中　郁子

木漏れ日の中に並びし実梅かな　寺尾千代子

鯉幟枢（ひつさ）の母と車窓から　原野レイ子

竹の子の光る産毛に包まれて　高橋　孝子

牧場には風の詩ある初夏の空　北川しんじ

葉桜揺らし犬と子走る公園に　佐藤　澄世

短歌会

黄砂降り山々薄く煙らひて寄りどころなき春となりたり　有久　賢治

屋久島に送るコーンは百袋収穫する手は汗ばみており　梅田　國雄

咲き揃うあやめの花は雨に濡れ一際色増すその紫の色　佐藤せい子

桜木の葉群の中に実の赤し椋鳥一羽飛び回りおり　中村トシエ

苞散りて枝に残れる緑葉のひと雨ごとに輝きを増す　馬場　礼子

すもう取る元気な子らの姿あり緑の芽吹く春のまつりに　松本　東亜